P-577 前立腺部尿道の異所性前立腺組織は、血尿や血精液症の原因になりうるか？

古屋病院¹⁾・札幌医科大学泌尿器科²⁾・札幌医科大学病理学³⁾
古屋聖児¹⁾・小椋 啓¹⁾・塚本泰司²⁾・磯村 洋³⁾

【目的】前立腺部尿道の異所性前立腺組織(Ectopic Prostatic Tissue, EPT)は、血尿や血精液症などの原因として知られている。しかし、このEPTがどのような機序で出血の原因になるのかは不明である。EPTの摘除標本では、しばしば粘膜下の出血病変が認められる。我々は、EPTの病理組織学的検討と鉄染色を行ない、この出血病変が摘出時の人工的なものか、病理学的変化によるものかを検討した。また、組織内の血管の定量的分析を行ない、EPTの血管の性質を検討した。

【患者と方法】11例のEPT症例の年齢は26歳～59歳(平均43.1歳)で、血尿は5例、血精液症は6例であった。H-E染色標本、PSA免疫組織学的染色標本、鉄染色標本を作製観察した。また、粘膜下の血管の短径と粘膜上皮からの最短距離を定量的に測定した。

【結果】8例(73%)に粘膜下の出血、5例(46%)に、血管内および血管外にフィブリン凝血塊を認めた。3例(27%)に、鉄陽性細胞を粘膜下間質に極少数認めた。EPTの組織内血管は、対照例と比較して、粘膜上皮からの距離は短く、内腔は明らかに大きかった。

【結論】我々は、EPT組織内の出血が病理学的変化であることを確かめた。血管の定量的測定の結果より、EPT組織内では循環障害の存在が推定され、組織内の出血が粘膜上皮を破綻して尿道内に出血すると考えられる。

P-578 肉眼的血尿の統計

東京医科大学八王子医療センター
松本 哲夫、辻野 進、鉾石 文彦

【目的】肉眼的血尿を主訴に泌尿器科を受診する症例を効率よく診断して行くためには、どのような検査をどのような順で行えば良いかを検討する。【対象と方法】泌尿器科開設以来の5年6ヶ月間に肉眼的血尿を主訴に受診した750例(男性461例、女性289例)の原因疾患を年齢別に検討する。【結果】無症候性血尿が約58%、症候性血尿が42%であった。周辺臓器の悪性腫瘍の尿路浸潤を含め悪性腫瘍は110例で、その約95%が無症候性血尿であった。年齢別では90歳代の50%、80歳代の32.5%、70歳代の28.7%を占めていた。尿路結石は99例あり30歳代が中心であり、結石全体の約60%が無症候性血尿であった。炎症性疾患は161例あり、2～50歳代の女性の膀胱炎、5～60歳代男性の急性前立腺炎が目立った。また150例、20%が原因不明であり、小結石の自然排石を疑わせるものが多かったが、長期の観察で2例に尿管腫瘍が発見されていた。77例、10%が検査の途中で来院しなくなっていた。【考察】肉眼的血尿の検索では、青年～壮年では他の症状の有無にかかわらず初診時にKUBを撮り早めのIP施行が、壮年～老年では内視鏡検査とIPがまず行すべき検査と考えられた。一方、原因が不明であった場合は少なくとも6ヶ月ごとの定期検査が必要であると考えられる。また、原因検索の途中で来院しなくなる症例も比較的多くみられ、これを避けるためには、初診時に検査の必要性について十分な説明が必要であると思われた。

P-579 腎動脈塞栓術を施行した巨大嚢胞腎の一例

長井市立総合病院 武藤明紀・恩村芳樹
公立志津川病院 鈴木泰宏
山形大学医学部 中田瑛浩

症例は、33歳男性。主訴は、腹部膨満感、血液透析導入及び内シャント造設目的。既往歴は特になく、家族歴は、嚢胞腎家系である。現病歴は、平成5年11月19日、他院より嚢胞腎にて紹介され、外来で経過観察続けていた。腹部膨満感、腹痛等の症状認めるようになり、次第に腎機能悪化、貧血増悪したため血液透析導入目的のため、平成9年7月23日、入院となる。7月25日内シャント造設術。7月31日透析導入。8月6日のCTでは、左右腎は大小無数の嚢胞を有し、実質は圧迫萎縮し、腹腔をほぼ占めていた。9月4日左腎動脈塞栓術を施行。塞栓術施行後、自覚的に腎縮小傾向認めた。10月31日CTにて、嚢胞腎のサイズ縮小を認め、腹壁の膨隆が改善した。

成人型嚢胞腎は、嚢胞性腎疾患の中では最も頻度が高い。遺伝形式は常染色体優性で、遺伝子座位は第4常染色体、及び第16常染色体短腕である。症状は無症状の時期もあるが、腎嚢胞の拡張に伴い臨床症状が現れ、腎実質の圧迫萎縮と慢性腎盂腎炎の合併のため腎不全症状が出現する。治療は経皮的嚢胞穿刺等があるが、感染症を伴う際は保存的治療を優先する。本症例の様に、血液透析導入された嚢胞腎患者にとって腎動脈塞栓術は有効な治療方法の一つと考えられた。

P-580 間質性膀胱炎患者および健康者の尿より抽出した Tamm-Horsfall Protein (THP)の尿路上皮細胞に対する cytoprotective activity

東京医大・University of California San Diego¹⁾
秋山昭人・伊藤貴章・山本真也・鯨島 剛・三木 誠・Paul C. Stein¹⁾・C. Lowell Parsons¹⁾

【目的】尿路におけるTHPの役割は不明である。我々は最近、様々な物質の培養細胞に対する毒性を定量化するアッセイ系を確立し、これを用いてTHPの尿路上皮細胞に及ぼす影響を検討した。

【対象および方法】間質性膀胱炎30例および健康者15例の尿からTHPをsalt precipitation法により抽出した。まず、膀胱粘膜のinactivatorであるprotamine sulfate (以下PS)を段階希釈(0.05-1.0mg/ml)し、⁵¹Crで標識した尿路上皮細胞(T24)とともに培養(1.5 hr/20 hr)し、放出される放射能を測定し毒性を定量化した(modified Chromium release assay)。次に、PSを数段階に希釈したTHP(0.1-1.0 mg/ml)とともに培養し、その影響を検討した。

【結果】PS(0.05-1.0mg/ml)の細胞毒性(% cytotoxicity)は2-40%(20 hr)であった。全希釈段階でPSの細胞毒性はTHPにより有意に減少した(p<0.001)。また、間質性膀胱炎患者から得られたTHPの作用は健康者のものに比べて有意に低かった(p<0.05)。

【考察】THPが尿路上皮細胞に対するcytoprotective activityを有することが明らかとなり、間質性膀胱炎患者のTHPの作用は正常に比べて有意に障害されていた。このことから、その障害が多彩な病態を示す間質性膀胱炎において重要な役割を果たす可能性が示唆された。